つい先ほどまで見上げるほどの位置にあったはずの太陽が、いつの間にか街の西側に連なる山々の陰に隠れようとしている。
空は気づけば朱色に染まっていて、ほどなく夜の帳が下り始めるだろう。
すっかり遅くなっちゃったな、と思いながら、視界の先に見なれた自宅の屋根を見つけて、なのははわずかにその歩調をゆるめた。
隣に並んだフェイトも、それに合わせるように自然と歩みを遅らせる。
八神家からの帰り道。どことなく心の底に割り切れないものを感じてぼんやりとしていたなのはの手を、フェイトが不意にそっと握った。
なにか特別なことを話したわけではない。ただ手を取って、微笑みかけてくれただけ。
それでもそのことがなのはには嬉しく思えて、それからずっと二人は手を繋いだまま歩いてきた。
なのはがフェイトの横顔を眺める。
夕陽の朱に染められたフェイトの肌は、わずかに火照っているようになのはには見えた。
その白と紅のコントラストが、
「きれい……」
思わずつぶやいたなのはに、
「……ん、なのは、どうかした?」
フェイトが振り向いて声をかける。
「な、なんでもないよ!」
自分はなにを言ってるんだろう、となのはは小さく息をついた。
フェイトはそれ以上なにか聞くこともなく、そう、とだけ答えて前に向き直る。
「あ、あの」
そのフェイトの姿に、なにかを言わなくてはいけないような、そんな衝動にかられて、なのははフェイトにもう一度声をかけた。
「あのね、フェイトちゃん。その、ありがとう」
「え?」
フェイトが首をかしげる。
「えっと、はやてちゃん家、つきあってくれて」
今日、はやての家に行こう、と先に言い出したのはなのはの方だった。
リインフォースとの別れのあと、その夜は騎士たちと共に過ごしたはやてだったが、今日の午後から四人は本局に行かなければならないと聞いて、なのははふとはやてのことを想った。
家に一人でいるのは寂しくないかな、と。
「ああ、ううん、私もはやての顔、見たかったし、それに」

フェイトが笑う。
「なのはにも会いたかったから」
その言葉に、なのはの足が止まる。
「……え？」
「昨日も会ったばかりだったのに、おかしいとは思うんだけど」
フェイトが苦笑するのを、
「う、ううん！　そんなことないよ！　わたしも、フェイトちゃんに会いたかったし！」
となのはは何度も大きく首を振って答えた。
「そっか、じゃあ良かったかな」
うなずいて、フェイトが歩き出す。
それについていきながら、なのはは自分の身体がわずかに熱を帯びていることに気づいて、小さく深呼吸をした。
なのはにも、会いたかったから。
フェイトの言葉を、頭の中で繰り返す。
離ればなれだった、この半年間とは違う。これからは、会おうと思えばいつでも会える。
それなのに、それでも。
会いたい、と。
「じゃあ、なのは、この辺で」
と、フェイトの声に、なのはは自分がいつの間にか自宅の前まで来ていたことを知った。
「え、あ、う、うん」
フェイトが、繋いでいたなのはの手を離す。
「あ……」
その手をなのはに向けて軽く振ると、フェイトはなのはに背を向けた。
「あ、あ」
なのはが、思わず手を伸ばす。
「あの、フェイトちゃん！」
自分でもほとんど無意識のうちに、なのははフェイトの名前を呼んでいた。
「ん……なのは？」
フェイトが、少し驚いたような顔で振り返る。
「ね、よかったら、今晩、家に泊まっていかないかな？」
なのはの誘いに、フェイトは一瞬言葉に詰まったあと、
「え、今晩？　でも、そんな急にお邪魔するのは」
迷惑じゃないかな、とフェイトが聞き返す。
「大丈夫だよ！　お母さんも、フェイトちゃんならいつでも歓迎って言ってたし！」
なのはが、フェイトの腕をつかむ。
「明日から冬休みだし、ね？」
なのはの勢いに気圧されたのか、フェイトは少しだけ考えたものの、すぐにそれじゃ……とうなずいて、
「あ、でもちょっと待って」

と携帯電話を取りだした。
「一応、確認しないと」
すっかり慣れた、といった手つきでキーを操作し、電話をかける。
「あ、フェイトです。あの、今晩なんですけど……」
その様子を眺めながら、なのははフェイトに友人たちの姿を重ねた。
アリサもすずかも、こういうときは必ず家に電話して、家族に許可を取る。互いに家ぐるみの付き合いがある関係で、だめ、と言われることなどまず無かったが、連絡だけは必ず入れる、というのがルールのようになっていた。
そしていま、フェイトがアリサたちと同じように、家に連絡して確認を取っている。電話の相手は、おそらくリンディ提督だろう。
自分たちの日常の光景の中に、フェイトがいる。そのことが嬉しくて、なのはの顔が思わずほころぶ。
「オッケーだって。じゃあなのは、えっと、お邪魔……します」
フェイトが少し照れたような顔で頭を下げると、
「うん！　歓迎だよ！」
フェイトの腕を取ったまま、なのははほとんど駆け込むようにして門扉をくぐり、玄関の扉を開けた。
「ただいまー！　おかあさーん！」
弾むようななのはの声に応えるように、おかえり、と姿を見せた桃子は、
「あら、フェイトちゃんいらっしゃい。今夜は、お泊まりかしら？」
と、なのはとフェイトの姿を交互に見て、全てを察したように微笑むのだった。
「フェイトちゃん、お母さんがデザートにって。一緒に食べよう」
なのはが、トレイに小分けにされたケーキと紅茶を持って部屋に戻ってきた。
「あ、ありがとう。なのは」
礼を言って、フェイトが受け取る。
その隣に腰を下ろして、なのはは窓から外を見た。
すでに日は落ち、空は暗い濃紺色に覆われている。
もう、すっかり夜も更けちゃったな。
そんなことを思いながら、なのはは視線を戻した。
――フェイトちゃんが、わたしの部屋に、いる。
なにかを確かめるように、なのはは頭の中でそう一言一言ゆっくりとかみしめながらつぶやいた。
フェイトを自分の部屋に招き入れるのは、今日が初めてというわけではない。
ただ、泊まり、となると話は違っていた。

これまでは闇の書の件もあり、学校が終わったあとはどちらかの家に集まって、呼び出しがあればいつでも動けるように待機しつつ魔法や戦技の訓練などをしていたが、それでもお互い夕食の時間には自宅に戻るようにしていた。
とくになのはの場合は家族に心配をかけたくないということもあり、また宿題などの本分は二人ともきっちりとこなすようにリンディから指示されていたため、日が落ちる前にはいつも帰宅の途についていた。
そして今日。事件も一段落し、これから少しはフェイトちゃんとゆっくり過ごせるかな、となのはが考えていた矢先。
フェイトが自宅に泊まりにきた。
もちろん、自分が誘ったことはわかっている。
一家にフェイトを加えた六人での夕食を終え、部屋で二人になってから、なのははずっと心臓の鼓動が自分でもはっきりとわかるほどに大きくなっているのを自覚していた。
「なのは？　食べないの？」
手にフォークを持ったまま身動きしないなのはを見て、フェイトが怪訝な顔をする。
「あ、うん、い、いただきます」
「どうしたの？　さっきからぼうっとしてるみたいだけど」
「え、そうかな？　にゃはは、ちょっと食べ過ぎちゃったかも」
ああ、晩ご飯美味しかったものね、と笑うフェイトに、そうなんだよ、となのはがうなずく。
「もしかしてなのは、お腹いっぱいなの？」
「お腹はいっぱいだけど、でも、えっと、お姉ちゃんが言ってた」
「なんて？」
「甘いものは別腹、なんだって」
「あ、それエイミィも言ってたよ」
「不思議だよね。お腹が二つあるわけじゃないのに」
「でも、ちょっとわかる気がするな」
フェイトが、皿に置かれたケーキを見る。
「なのはの家のケーキ、ううん、ケーキだけじゃなくてどれもみんな美味しいもの。リンディ提督も褒めてたし」
「リンディさん、甘いもの好きそうだもんね」
なのはがそう言って笑おうとしたとき。
不意に、フェイトの瞳から涙が一筋、頬をつたって落ちた。
「フェイトちゃん？　泣いてる、の？」
「あ、ごめんね、なのは」
フェイトが指先で目元をぬぐう。
「ちょっとね、母さんのこと、思い出しちゃって」
「プレシア……さん？」

「うん。出来ればこのケーキ、母さんと……」
フェイトが言いかけたとき、
「なのはー」
ノックの音とともに、ドア越しに美由希の声がした。
「お、お姉ちゃん？　なあに？」
「お母さんが、お風呂入っちゃなさいって、フェイトちゃんも」
「はーい！」
答えて、なのはがフェイトを見る。
フェイトはもう一度目尻に浮かんだ涙をぬぐうと、普段と変わらない落ち着いた表情でゆっくりと立ち上がった。
「それじゃ、いこうか。なのは」
「え、いくってどこに？」
「もちろん、お風呂だよ」
「ふえええぇっ!?」
フェイトの言葉に、なのはは座り込んだまま手だけで後ずさった。
「あ、あの、フェイトちゃん、お先に」
「え？　でも、一緒に入った方が早いし、桃子さんもそのつもりで言ったんじゃないかな」
「で、でも」
「なのは、大丈夫？　なんだか顔が赤いけど」
「大丈夫、大丈夫だけど、あの」
「ほら、なのは、いこう。あんまり待たせるのも申し訳ないし」
フェイトが、なのはに手を差し出す。
「うう、うん」
観念したように、なのははフェイトの手を取った。
「お風呂は、下だっけ」
「う、うん。こっち、だ、よ」
フェイトの手を引いて浴室へ向かいながら、なのははいまにも弾けてしまいそうなほどに高鳴っている鼓動を必死に押さえようとしていた。
なんなのだろう。
なぜ、自分はこんなに緊張しているんだろうか。
友達と二人でお風呂に入る、というのはべつに初めてということでもない。
アリサ、すずかのどちらともこれまでに何度も機会があったし、アリサやすずかの家に遊びに行ったときなどは三人一緒に入ったこともあった。
それなのに。
脱衣所に入り、服を脱ぐ。
なぜか見てはいけないような気がして、なのははずっとフェイトに背を向けていた。
衣擦れの音が、なのはの耳に響く。
それが気になってもたついているうちに、フェイトは先